

# 事例 3 Cさん

仮出所による初の受け入れ。  
薬物中毒の対応のため、  
施設外の社会資源(精神病院)と連携する。



本人のニーズ  
長崎県で働いて、  
お金をためて  
アパート暮らしを  
したい。いつかは  
お母さんと呼んで  
一緒に暮らしたい

年齢(受け入れ時) 20代

療育手帳 あり(B1)

罪名 覚せい剤取締法違反

刑期 懲役1年8か月

入所回数 初入

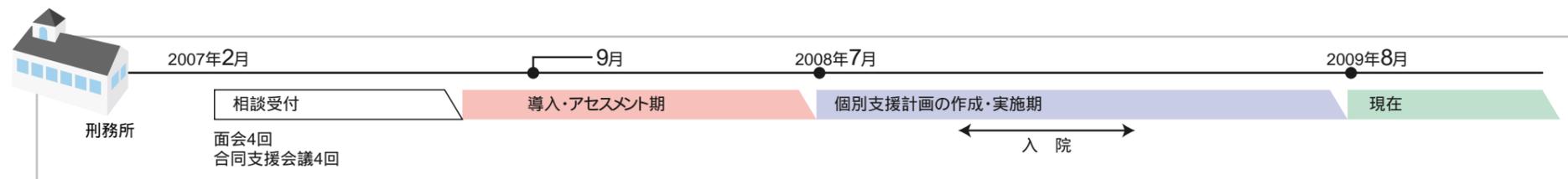
出所形態 常務理事を身元引受人としての仮出所。

## 生活環境づくり

暴力団関係者による覚せい剤売買に関連して、消費者金融からの返済請求等が予測されるため取立ての連絡等には応じないよう職員間での対応を統一した。  
電話連絡、手紙なども本人の所在・住居が分からないように法人全部署へ意思統一をお願いした。窓口を身元引受人に絞り、情報が流出しないように心掛けた。  
本人へもホームの住所や連絡先が分からない様、住所・電話番号一覧表は撤去した。  
病気誘因となる有機溶剤(油性マジック、除光液、接着剤等)の撤去  
精神科医による薬物についての職員研修

## 受け入れ

仮出所による初めての受け入れ。



導入・アセスメント期	個別支援計画の作成・実施期	現在
<p>仮出所期間であるため、保護司との面談等を通し、自分を見つめる機会、罪を見直すことに重きを置く。安定の動機づけとして、日中活動ではヘルパー2級の取得。長崎県が楽しい場所と印象づけるよう、休日には積極的に外出した。 生活面では暴力団関係者からの隔離と、生活リズムをつけるため、生活訓練に特化した女性のみケアホームで受け入れ。</p>	<p>ヘルパー2級は取得できたが、将来展望が定まらず。 ピアカウンセリングを目的に、障がいが多いホームに生活の場を移す。 仮出所期間終了後、日中活動・生活面共に不安定な状態が続き、女性職員への暴力もあり精神病院へ一時入院。</p>	<p>入院中に心の整理を行う中で、自らのニーズを再確認する。 日中活動は就労移行支援を目指し事業所外での実習を開始。生活の場も住宅地内のケアホームに移動し、少しずつ目標に向けた取り組みが始まっている。</p>
<p><b>日中活動</b> 自立訓練(生活訓練) (長崎県雲仙市) 定員10名 職員4名</p>	<p>→</p>	
<p><b>職員配置</b> Cさん : 担当職員(男性、勤続19年) 問題発生時には個別対応</p>	<p>外部実習は Cさん : 職員 事業所内は通常の職員配置</p>	
<p><b>活動内容</b> 牛の管理作業 ヘルパー取得・生活介護事業所での実習</p>	<p>牛の管理作業(給餌)</p>	<p>一般事業所、 就労継続支援B型での実習</p>
<p><b>生活の場</b> まち郊外の丘陵 定員5名(女性) 職員1名(宿直型) ケアホーム (長崎県雲仙市)</p>	<p>定員5名(男女混合・重度) 職員2名(ケア職員付き) ケアホーム (雲仙市)</p>	<p>住宅街 定員4名(男女混合・重度) 職員1名(ケア職員付き) ケアホーム (雲仙市)</p>
<p><b>職員配置</b> Cさん : 担当職員 (女性、勤続7年)</p>	<p>通常の職員配置 問題発生時には個別対応</p>	<p>通常の職員配置</p>
<p><b>休日・外出</b> 職員がマンツーマンで外出支援</p>	<p>平日にマンツーマンで外出支援</p>	

### 保護観察所との連携

出頭する決まりはなかったが、毎月保護観察所へ職員と一緒に出頭し、現状報告と尿検査を行った。再犯防止の意識付けで保護観察官からも本人へ、厳しくそしてあたたかい話をしていた。

### 保護司との連携

月一回の面談日を設定し、現状報告または支援に当たっているスタッフには話せない悩みなど打ち明けることができ、保護司からスタッフへ支援のヒントをいただいた。

### 精神科医との連携

覚せい剤の使用の前歴があったため受け入れ時から精神科医の協力をいただく。  
職員への薬物に関する講習の開催。本人への2週間に1回程度の受診とカウンセリング、不安定さが顕著になった際の精神科への入院による医療的支援の切り替え等、協力をいただく。



### キーパーソン = 定まらず

障がいの特性上、他人の感情を理解することが難しく、生育歴や罪につながった恋人との関係から、依存はしやすいが他人との間になかなか信頼関係を構築できない。そのため、キーパーソンが定まらず、支援を行う上で、最大の課題点となった。

## 本人の夢



就労移行支援を経て、一般就労で長く働きたい。職業・職種の希望はない。



お母さんと一緒に暮らすこと。

## アセスメント表

氏名	Cさん		男・女	障害 基礎年金	有・無	1級・2級・申請中
療育手帳	有・無	等級 B 2 B 1(受刑中に再判定)	精神手帳	有・無	等級	
身体手帳	有・無	等級	IQ相当値		障害程度区分	区分 3
家系図				住宅		
				経済状況		
家庭状況	<p>両親は、本人の生後すぐ離婚するが本人は小4まで父親と同居。父親の母親に対するDVを見て育つ。現在の家族は母と3人の兄。本人は次兄に怒られるのが怖く家出を繰り返していた。母親は知的障がい疑い。</p>					
犯罪面						
罪名	覚せい剤取締法違反	刑名 刑期	懲役 1年 8か月 懲役 1年 4か月	刑期	年×月～ 年×月	
受け入れ日	2007年 9月	入所度数	初入	再犯期間		
犯罪の概要及び動機・原因	<p>交際相手や知人より覚せい剤を強要される。気分が良くなることから使用を反復。23歳時執行猶予付くものの26歳時再度交際相手より覚せい剤を強要され、乱用、警察に駆け込み逮捕される。</p>					
犯罪性の特徴	<p>幼稚で理解力や判断力が乏しい。自信がなく、気弱で人から受け入れられようとして同調しやすい。他の人への依存心が強く、反社会的集団に巻き込まれやすい。</p>					
非行・犯行歴	<p>15～18歳 家出・シンナー乱用。 23歳～ 覚せい剤乱用。</p>					
中毒	特記	<p>中毒の有無 (有)【種類：有機溶剤】・無) 有機溶剤慢性中毒。覚せい剤依存の状態ではないかと精神科医より診断される。</p>				
		<p>反社会的集団との関係 (有)・無)</p>				
反社会的集団との関係	特記	<p>交際相手、働いていた職場などやくざがらみであった。</p>				

point 1

2008年11月に入院時にMRI検査を行った結果、シンナー、覚せい剤のため脳の萎縮がかなり進んでいる(80才値)ことが判明する。

point 2

家庭訪問を行った結果、母親にも家族性障がい疑われ、保護能力が低く、出身地に戻った場合、これまでの人間関係に巻き込まれ再犯に至る可能性が高い。反社会的集団との隔離が急務に。

# 支援の流れ

## 導入・アセスメント期

期間:2007年9月~2008年7月

## 個別支援計画の作成・実施期

## 現在

保護観察期間中の意識づけと反社会的集団からの隔離を支援の中心とする。

	事業所	職員配置	活動内容
 日中活動	 <b>自立訓練(生活訓練)</b> (長崎県雲仙市) 定員10名 職員4名	 Cさん 担当職員(男性、19年) 問題発生時には個別対応	牛の管理作業 ヘルパー取得・生活介護事業所での実習
 生活の場	 <b>ケアホーム</b> (長崎県雲仙市) 定員5名(女性) 職員1名(ケア職員付き) まち郊外の丘陵	 Cさん 担当職員 (女性、勤続7年)	職員がマンツーマンで外出支援

### ヘルパー取得で仮出所期間中の動機づけを行う

就労を希望していたため、受け入れ時には職業訓練法人 長崎能力開発センターでの職業訓練も想定していた。受け入れ後の対応から、同センターでの2年間の集団生活は難しいと判断し、自立訓練(生活訓練)就労移行支援を使用した就労支援に切り替える。

面接の際に牛の絵を喜んで見ていたことから、和牛の飼育を行う自立訓練(生活訓練)で受け入れる。相性の悪い利用者の影響で不安定になり、事業所を飛び出すことが出てくる。本人の長所を活かし、仮出所期間中の動機づけとして、同事業所を利用しながら、ヘルパー2級の取得を目標に設定する。

#### ねらい 留意点

- ・仮出所期間中であり、再犯をしないように意識継続、忘れないように日中・生活連携して支援を行う。(遵守事項の遵守、保護観察所への出頭、保護司との面談)
- ・本人のニーズ・行動特性の把握を図る
- ・本人を犯罪から守る

### 規則正しい生活リズムをつける

暴力団関係者との隔離と、保護観察期間であるため規則正しい生活リズムをつけることを優先し、事例②と同じく、生活訓練を行うケアホームで受け入れた。

故郷を離れ、職業トレーニングをし、就職すると希望していたが、母、故郷への思いが強くなり、「故郷へ帰りたい」との言葉が聞かれるようになる。長崎が楽しい場所であるという印象がもてる様、休日にはホームメンバーと積極的に買い物やドライブ、図書館への外出を行った。

#### 本人の様子

当初は、終日作業をすることはできなかったが、徐々に体力がついてくる。

保護司への信頼度はかなり高く、面談のほかレターカウンセリングも行っていった。また保護観察所への出頭も現状の報告、相談等できるためとても楽しみにしていた。

周りのホームに住んでいる障がい重い人へのやさしさがあり、お世話をすることで安定していた。

しかし、対人トラブルが多く、一度関係が悪化してしまうと自己解決できず、暴言、暴力、飛び出しが多々あった。特に刑期終了前後に心の揺れがあった。故郷に戻ったら、また犯罪に巻き込まれることは分かっているながらも、自分の中でうまく処理ができないでいた。

#### 職員の思い

刑期終了前後の葛藤を和らげる支えとなりえなかったことが、今思い出しても自分の力の足りなさに悔しさがこみあげてくる。

本人の特性上、わかりやすい具体的な目標設定を行っていたら、もっと安定して過ごすことができたのではないかと、毎日こうしたらいいのかな、どうしたらよかったのかと考える日々だった。導入期ということで観察も必要だったが、どうやったら、本人のモチベーションが上がるのか試行錯誤だった。

導入・アセスメント期

個別支援計画の作成・実施期

現在

期間:2008年7月~2009年8月

適確な個別支援計画の模索。情緒不安定になるも入院を経て安定へ。

	事業所	職員配置	活動内容
 日中活動	 <b>自立訓練 生活訓練</b> (雲仙市) 定員10名 職員4名	 Cさん : 担当職員 (男性、勤続19年)	牛の管理作業
 生活の場	 <b>ケアホーム</b> (雲仙市) 定員5名(男女混合・重度) 職員2名(ケア職員付き) まち郊外の丘陵	 通常の職員配置 問題発生時には個別対応	平日にマンツーマンで外出支援

### 自立訓練で就労の基礎を身につける

時間をかけて就労につなげることを個別支援計画の中心に据える。ヘルパー取得後は、自立訓練(生活訓練)に復帰し、引き続き和牛の世話を行った。また、仮出所期間が終了し、司法による束縛がなくなることを踏まえ、情緒安定と長崎に残るモチベーション作りも課題とした。

#### ねらい 留意点

- ・就労に向けた基礎作りを行っていく。
- ・導入期で多く見られた対人関係のトラブルを防ぐため、周りの人とのコミュニケーション力をつける。
- ・本人に適した活動メニュー(就労の場)の模索を開始する。

### ピアカウンセリングから生活の安定を図る

導入期に障がい重い方との触れ合いから、元来のやさしさ、明るさが見られたことをヒントに、障がい重い方の多いホームへ移動する。宿直者も各部署から年齢・性別共に様々な人と関わるようになる。

休日には、当事者団体の行事にも積極的に参加し、障がいをもちながら地域で働いている人との交流から、将来に向けて具体的な目標、理想をイメージしやすいよう試みた。

#### ねらい 留意点

- ・障がい重い方との生活を通じて情緒の安定を図る。

#### 本人の 様子

とても、揺れた時期であった。精神科受診を定期的に組み込みながら、情緒の安定を図っていく。ホームでの利用者間のトラブルはなく、優しさもみられたが、若い男性職員に対しての憧れから不安定になり、断続的に飛び出しや暴言等の問題行動が目立つ。そのため当事者団体での交流も行えなくなる。

情緒不安定さが顕著になり、日中活動へも参加出来なくなる。2008年11月に女性職員へ激しい暴言・暴力を行ったことにより、福祉支援から医療支援に切り替え、2009年1月まで精神科へ入院する。環境を一旦変えたことで、福祉サービスの必要性を再認識し心の整理ができた。入院か福祉かの選択で福祉を選ぶ。本人も自らのニーズを再び思い出す事が出来た。ニーズを意識しやすいよう、より具体的な目に見える目標設定を行った。

#### 目標

安定をすれば事業所外での実習を始めることを目標にする。生活と共通の課題を設ける。(生活の場を参照)

#### 目標

①無断で飛び出さない、②悪口を口に出さない。(何かある時はノートに書いて担当へ持っていく) ③毎日出勤をする、④落ち着いて仕事をするの4点を課題に評価をする。

日中活動は事業所外での実習、まちの中での生活を開始し、共に次のステップへ進む。

	事業所	職員配置	活動内容
 日中活動	 <b>自立訓練(生活訓練)</b> (雲仙市) 定員10名 職員4名	外部実習は  :  Cさん 職員 事業所内では通常の職員配置	一般事業所、就労継続支援B型での実習
 生活の場	 <b>ケアホーム</b> (雲仙市) 定員4名(男女混合、重度) 職員1名(ケア職員付き) 住宅街の中	 :  事業所内では通常の職員配置	まちの中のグループホームへ移動 母親と年齢の近い世話人と関係し、状態は安定

## 個別支援計画

支援の全体目標	長期目標 本人が安定して長く就労できる場での就職(一般就労、就労継続A型・B型)を目指す 短期目標 就労移行支援への移行			
ニーズ (解決すべき課題)	支援目標	サービス内容	頻度・ 時間	目標達成 時期
自己評価と現実と大きなギャップがある	地域の事業所での実習を通して、自分の力を知る	職員が同行し、作業の説明や評価などを行う。 毎日チェック表をつけ、自分の課題点を分かるように説明をする	2009年8月～	2010年3月
対人関係を円滑に築くことができない 思ったことをすぐ口に出してしまう	対人関係を円滑に築くことができるようになる	その場で、即時対応する。 声かけ・意識付け。	年間を通して 毎日適宜	2010年3月
ほかの人に合わせるのが苦手	社会のルールやマナーを身につける	集団生活を通して、実践的にルールやマナーを学べるようにする。 挨拶訓練	年間を通して	2010年3月
情緒不安定さを持っている	情緒の安定を図る	思っていることを話せる時間を作る。 個別対応	年間を通して 適宜	2010年3月

(2009年7月1日作成)

## 本人の夢

- 日中** 就労移行支援を経て、一般就労で長く働きたい。職業・職種の希望はない。
- 生活** お母さんと一緒に暮らすこと。

## 支援のまとめ

- 初めての仮出所による受け入れであった。法的拘束期間を福祉的支援への移行期にあてることが出来た反面、刑期終了前後には様々な制約の反動による不安定さが現れた。
- 覚せい剤使用という福祉を超えた支援が必要になったが、保護観察所、保護司との面談による意識付け、精神科と連携した医療的支援等、福祉外の機関を巻き込むことで手厚い支援を行えた。
- 利用者との信頼関係を結べるキーパーソンが定まらなかったことが、安定した支援に至らない一因となった。逆にキーパーソンの重要性を浮かび上がらせることになった。
- 入院をしたことで「福祉」の必要性を再認識。